

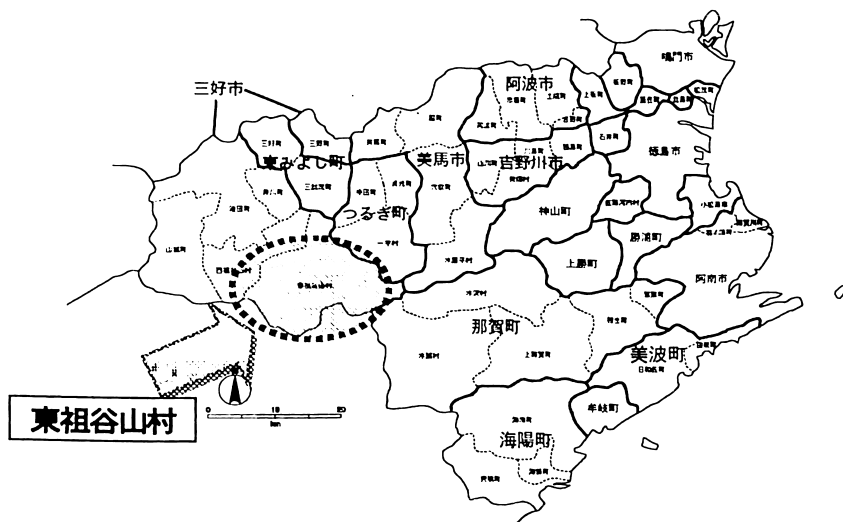
徳島県旧東祖谷山村のアクセント

村田 真実ⁱ

1. はじめに

本稿では、2006年から2007年にかけて徳島県旧東祖谷山村で行われたアクセント調査の結果を元に、旧東祖谷山村のアクセントについて論ずるものである。

以下、本稿では市町村合併前の名称を用いる。旧市町村名と新市町村名の関係は、図1を参照されたい。



<図1：新旧市町村名とその位置>

調査対象地である東祖谷山村は現三好市・旧三好郡に属し、木頭村、一字村、西祖谷山村に隣接し、また池田町、山城町とも近い場所にある。県西部のこの辺りはアクセント体系が実に複雑であり、先行研究では、東祖谷山村は西祖谷山村や木頭村と同様に京阪式アクセントの変種が聞かれるとされ、また、一字村、山城町では讃岐アクセントの変種である山城谷アクセントが聞かれるとされている。同じく現三好市の池田町出合では、出合アクセント

と呼ばれるアクセントが聞かれる。(山名・1956、森・1982、上野/山波/森・1991、上野・1997) このように、県西部については、京阪式アクセントが派生したものや讃岐式アクセントが派生したもの、そのどちらとも異なる独特のアクセント等が複雑に入り乱れており、体系の把握が難しい。

このような県西部のアクセント体系をより明確にする為にも、東祖谷山村のアクセント体系を把握することは必要なことだと思われる。

2. 調査の概要

2006 年から 2007 年にかけて徳島大学国語学研究室で行われた調査の結果を資料として利用した。以下に調査の概要を記す。

調査期間：2006 年 7 月 28 日～7 月 29 日

2006 年 9 月 15 日～9 月 17 日

2007 年 11 月 23 日～11 月 24 日

調査対象：話者は両親共に東祖谷山村出身で、東祖谷山村で生まれ育った人に限定した。話者情報は表 1・2 の通りである。表 2 の話者番号は、はじめ 2 桁が調査時の話者の年齢、次のアルファベットが性別 (M：男性、F：女性)、最後の数字は便宜上の識別番号である。

<表 1：年代別・性別人数>

| | 男性 | 女性 | 計 |
|------|----|----|----|
| 80 代 | 1 | 0 | 1 |
| 70 代 | 4 | 3 | 8 |
| 60 代 | 0 | 2 | 2 |
| 計 | 5 | 5 | 10 |

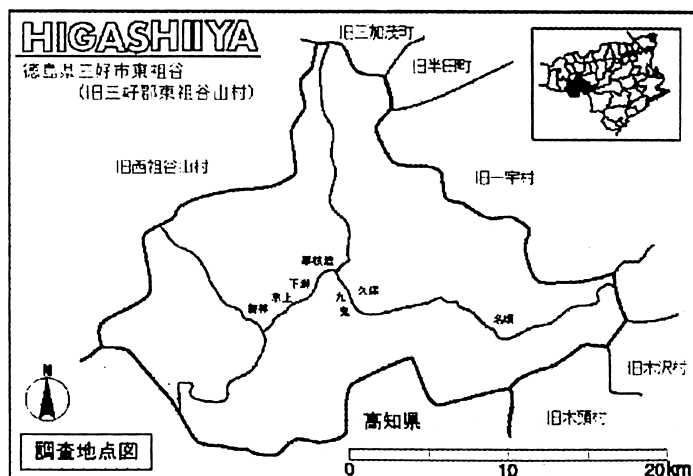
<表 2：調査地点別人数>

| 調査地点 | 人数 (話者番号) |
|------|-----------------|
| 久保 | 2 (71M2、61F3) |
| 九鬼 | 2 (76M4、74F5) |
| 栗枝渡 | 1 (73M8) |
| 下瀬 | 1 (77M9) |
| 京上 | 1 (64F13) |
| 若林 | 1 (78F16) |
| 名頃 | 2 (80M18、78F19) |

調査地点：調査地点は東祖谷山村に存する七つの集落である。集落名は、

くぼ　くき　くりすど　しもせ　きょうじょう　わかばやし　なごろ
久保、九鬼、栗枝渡、下瀬、京上、若林、名頃で、それぞれの場所

は図2を参照頂きたい。線で表したのは河川である。



旧東祖谷山村

<図2：東祖谷山村の集落>

調査方法：調査方法は一對一の面接調査である。話者にアクセント表を手渡し、それを読み上げて頂き、ICレコーダーで録音した。それを筆者が聞き取り、記号化した。Hを高拍、Lを低拍として記述した。特別に助詞をあらわしたい場合はハイフンで繋いだ（「竹を」が低高高なら LH-Hと表記する）。

調査語彙：調査語彙は『早稲田語類』（坂本他・1998）から偏りなく選んだ。名詞は名詞単独、名詞＋助詞＋動詞、「この」＋名詞＋助詞＋動詞の項目を設けて詳細に調べた。動詞・形容詞は語単独の形のみ調べた。具体的な調査語彙は、以下の通りである。

<表3：調査語彙>

| | | 語彙 | |
|------|---|-------------------|-------------------|
| 一拍名詞 | 第一類 | 蚊、毛、血 | |
| | 第二類 | 葉、日、矢 | |
| | 第三類 | 絵、木、根 | |
| 二拍名詞 | 第一類 | 竹、鳥、箱、端、水 | |
| | 第二類 | 歌、人、音、冬、雪、蟬、北、梨、 | |
| | 第三類 | 花、犬、耳、山、亀、足、朝 | |
| | 第四類 | 肩、松、息、針、箸、糸、海、跡、数 | |
| | 第五類 | 声、窓、井戸、蜘蛛、秋、鶴、鍋 | |
| 三拍名詞 | 第一類 | 魚、形、着物、鼻血、車 | |
| | 第二類 | 二つ、二人、毛抜き、蜥蜴 | |
| | 第三類 | 小麦、力、二十歳 | |
| | 第四類 | 鏡、刀、女、袋、男、サザエ | |
| | 第五類 | 朝日、心、油、簾、柱 | |
| | 第六類 | 兎、狐、雀、蛙、鼠 | |
| | 第七類 | 便り、後ろ、蚤、兜、鯨 | |
| 四拍名詞 | 飴玉、さいころ、そうきん、栓抜き、爪切り、絵日記、矢印、家計簿、たまねぎ、にんじん、針金、焼酎、かまぼこ、日本語、ふりそで、青空、足跡、胃袋、市役所、消しゴム、折り紙、目印、ひょうたん、耳かき、餅つき、くちびる、お菓子屋、カツ丼、満月 | | |
| 二拍動詞 | 第一類 | 五段活用 | 売る、買う、乗る、積む、飛ぶ |
| | | 一段活用 | 着る、する、寝る、似る、煮る、いる |
| | 第二類 | 五段活用 | 打つ、飼う、書く、読む、切る、住む |
| | | 一段活用 | 来る、出る、見る、得る |
| 三拍動詞 | 第一類 | 五段活用 | 歌う、並ぶ、囲む、使う、昇る |
| | | 一段活用 | 負ける、燃える、挙げる、着せる |
| | 第二類 | 五段活用 | 余る、思う、作る、泳ぐ、困る |
| | | 一段活用 | 起きる、逃げる、受ける、降りる |
| | 第三類 | — | |

| | | |
|-------|-----|----------------------|
| 四拍動詞 | 第一類 | 固まる、教える、並べる、忘れる |
| | 第二類 | 調べる、助ける、別れる、破れる |
| | 第三類 | 抱える、支える |
| 二拍形容詞 | 第一類 | — |
| | 第二類 | 無い、良い、ええ |
| 三拍形容詞 | 第一類 | 赤い、浅い、甘い、暗い、厚い、薄い、重い |
| | 第二類 | 白い、熱い、痛い、多い、黒い、近い、太い |

3. 調査の結果

まずは、品詞・拍別に調査の結果を報告する。そうすることで、東祖谷山村の集落ごと、或いは個人ごとのアクセント体系を明らかにしたい。

3-1. 名詞のアクセント

3-1-1. 一拍名詞

第一類は、助詞付きの場合、名頃の 78F19 からだけ H-L が聞かれた。その他の話者からは L-H が聞かれた。但し、「この」付き[□]の場合は、「この+蚊が」=LH+HH のように語頭の低下がなくなり、調査語が前接拍の高さを引き継ぐ形となった。そして語頭の低下は句頭の低下となり、「この」の一拍目「こ」が低下するようになった。下瀬、久保、京上、九鬼、栗枝渡、若林の話者からはこのようなアクセントが聞かれたわけであるが、名頃の話者からは LH+HL のように H-L という音調が聞かれた。特に 78F19 に顕著であり、他の話者が L-H (LH+HH) と発音するところを、78F19 は H-L (LH+HL) と発音した。句頭の低下は他の話者と同じように起こっている。

第二類については、どの集落、どの話者でも H-L で安定していた。「この」付きの場合、調査語+助詞は H-L になるのであるが、句頭の低下が起こったり起こらなかったりした。句頭低下の生起条件は不明であり、話者による偏りは見られなかった。

第三類からは L-H が聞かれた。「この」付きの場合、第一類と同じように語頭の低下がなくなり、調査語が前接拍の高さを引き継ぐ形となった。そして句頭が低下するようになった (LH+HH)。但し、名頃の話者からは「この絵が」「この根が」について LH+LH が聞かれ、句中の低接性が保持されていることが分かる。この性質は名頃の話者にしか認められなかった。

以上、一拍名詞の結果をまとめると、下瀬、久保、京上、九鬼、栗枝渡、若林の類の統合状況は2 (1・3/2) となる。名頃については2名の話者の結果が一致しないので集落単位では言及出来ないが、個人単位では、80M18 は 2 (1・3/2)、78F19 は 2 (1・2/3) となった。

第一類から第三類まで、語単独の場合も、助詞付きの場合も、引き音は聞かれなかった。これには調査方法（読み上げ式による）が影響している可能性もあるが、話者の内省によると、一拍名詞の長音化は起こり難いようである。

3-1-2. 二拍名詞

第一類は、LH・LH-H で安定している。どの集落のどの話者もほぼ全ての語について LH・LH-H と発音した。但し、「この」付きの場合は、「この+竹が」=LH+HHHのように語頭の低下がなくなり、調査語が前接拍の高さを引き継ぐ形となった。そして語頭の低下は句頭の低下となり、「この」の一拍目「こ」が低下するようになった。これは一拍名詞の第一類に起こっているのと同じ現象である。

第二類と第三類の音調は、HL・HL-Lで安定していた。

第四類からは、LH・LH-H が聞かれた。第一類と同じように「この」がついた場合、調査語の語頭が高くなる。殆どの語で LH・LH-H が聞かれたわけであるが、「肩・糸」からは LH・LLH が聞かれた。これについては後続拍が高ければ LL・LLL となる現象が起こった。尚、「海」については特殊な動きをしているようで、京上の 64F13、九鬼の 74F5 からは HL・HL-L が、その他の話者からは LH・LH-L が聞かれた。また、話者を個別に見てみると、名頃の 80M18 からは安定して LH・LL-H が聞かれており、京阪式アクセントの面影が見出せる。

第五類の音調は、主に LH・LH-L が聞かれた。但し、「声、窓、蜘蛛」については HL・HL-L が聞かれた。これらの語は第二類・第三類相当の語になっていると考えられる。「窓が」が東祖谷山村で HL-L と発音されることは先行研究（生田・1951）でも指摘されている。また、隣接する地域である木頭村の調査（上野・1994）でも「窓」のアクセントは HL であったと報告されている。「声」も同様である。その他の語については、LH・LH-L が聞かれた。

以上、二拍名詞の統合状況は、3 (1・4/2・3/5) となった。

3-1-3. 三拍名詞

第一類は、全ての集落、全ての話者から安定して LHH・LHH-H という音調が聞かれた。但し、「形」という語については類内で特別な動きをしているようで、HLL・HLL-L が聞かれた。一拍名詞・二拍名詞と同様に「この」付きの場合は、「この+車」= LH+HHHH のように語頭の低下がなくなり、調査語が前接拍の高さを引き継ぐ形となった。そして語頭の低下は句頭の低下となり、「この」の一拍目「こ」が低下するようになった。第一類以外にも LHH・LHH-H が聞かれる場合があるが、「この」付きの句の音調は同じように規則的に変化を起こすことを記しておきたい。

第二類は、安定して LHL・LHL-L という音調が聞かれた。但し、「毛抜き」については、異なる音調で発音する話者もあった。京上の 64F13、九鬼の 74F5 は LHH・LHH-H、名頃の 78F19 は HLL・HLL-L と発音した。他の話者は全ての語を LHL・LHL-L で読み上げた。

第三類について、「二十歳、力」は HLL・HLL-L で発音された。但し、「力」については九鬼の 76M4 から特別に LHL・LHL-L が聞かれた。「小麦」からは様々な音調が聞かれた。下瀬の 77M9、久保の 61F3・71M2、九鬼の 74F5からは LHL・LHL-L、京上の 64F13、名頃の 78F19 からは LHH・LHH-H、九鬼の 76M4、栗枝渡の 73M8、名頃の 80M18 からは HLL・HLL-L が聞かれた。第三類の音調については、集落間での差とは言い難く、「小麦」をどう発音するかは個人に拠るところであると考えられる。

第四類は、語によって音調が異なる結果となった。3種類の音調が聞かれた。まず一つ目は HLL・HLL-L である。「男・サザエ・女」などからこの音調が聞かれた。二つ目は LHH・LHH-H (x) である。「袋」の音調である。「袋」については例外的な音調として、下瀬の 77M9 と名頃の 78F19 から LHL・LHL-L (z) が聞かれた。三つ目は LHL・LHL-L (y) で「鏡、刀」から聞かれた。但し、「鏡」については、京上では LHH・LHH-H と発音するようである。

第五類も、第四類と同様に、語によって音調が異なる結果となった。3種類の音調が聞かれた。まず一つ目は HLL・HLL-L (y) である。「朝日、心」からこの音調が聞かれた。また、「油」については名頃の話者から HLL・HLL-L が聞かれたが、これは集落的な特徴であると考えられる。二つ目は、LHH・LHH-H (x) である。これは「油、簾」から聞かれた。前述の通り、「油」は

名頃で HLL・HLL-L、その他の集落で LHH・LHH-H となる。「簾」については、LHL・LHL-L と発音する話者もあった。三つ目は、LHL・LHL-L (z) である。「柱」からこの音調が聞かれた。

第六類は、どの集落、どの個人からも安定して LHH・LHH-H が聞かれた。第六類に限らず、LHH・LHH-H の音調が聞かれる場合は、「この」付きになると、「この+兎が」=LH+HHHH のように語頭の低下がなくなり、調査語が前接拍の高さを引き継ぐ形となる。そして語頭の低下は句頭の低下となり、「この」の一拍目「こ」が低下するようになった。

第七類からは、どの集落、どの個人からも安定して LHL・LHL-L が聞かれた。

以上、三拍名詞をまとめると、類の統合状況は 3 (1・4x・5x・6/2・4y・5y・7/3・4z・5z) ということになる。第四類と第五類の語は、音調によって類内で分裂する。

3-1-4. 多拍名詞

主に四拍名詞について調査を行った。聞かれた音調は次の 4 種類であった。 δ 以外の語は必ず語頭が低下する。

<表 4: 多拍名詞の音調の種類>

| | 音調 | 語彙 |
|------------|-------|-------------------------------------|
| α | ○○○○ | 飴玉、さいころ、爪切り、にんじん、針金、日本語、お菓子屋、カツ丼・・・ |
| β | ○○○」○ | 家計簿・・・ |
| γ^v | ○○」○○ | (胃袋、折り紙・・・) |
| δ | ○」○○○ | 満月・・・ |

※ 」は核の位置を示す。

四拍名詞は類の別がないため、語を個別に見ていく。まず、全ての集落、全ての話者で同じ音調が聞かれた語について述べる。「飴玉、さいころ、爪切り、にんじん、針金、日本語、お菓子屋、カツ丼」からは α の音調が、「家計簿」からは β の音調が、「満月」からは δ の音調が聞かれた。これらの語以外については、個人によってさまざまな音調が聞かれた。「そうきん」については集落によって違いが見られた。名頃の 2 名からは δ が聞かれたが、その他

の話者からは α が聞かれ、語の所属が集落によって異なっていることが分かった。「栓抜き」については α と β の音調が聞かれた。 β で発音したのは久保の 61F3、京上の 64F13、名頃の 80M18 で、それ以外の話者からは α の音調が聞かれた。どちらの音調が出るかということについて、集落、個人（年齢・性差など）による偏りは見られなかった。「絵日記」についても傾向は同様で、音調は β と δ が聞かれた。 δ で発音したのは、久保の 71M2 と九鬼の 76M4 である。「矢印」については殆ど話者が δ で発音したが、九鬼の 74F5 と名頃の 80M18 だけが γ で発音した。「たまねぎ」については集落による違いが見えた。栗枝渡の話者からは δ が聞かれたが、他の集落の話者からは β の音調が聞かれた。「焼酎、ふりそで」については α と δ が半々に聞かれた。「かまぼこ」は、若林の話者からのみ γ の音調が聞かれ、その他の集落の話者からは α の音調が聞かれた。「青空」については α の音調が聞かれたが、久保の 71M2 からは β 、若林の 78F16 からは γ の音調が聞かれた。個人間で差があるようである。「足跡」については α の音調が聞かれた。唯一、名頃の 80M18 からは有核化した β が聞かれた。「胃袋」については γ と δ の音調が半々に聞かれた。 γ の音調を個人の中に持たない人が δ の音調で発音したのだと考えられる。「市役所」については集落差が見られた。下瀬の話者からは δ 、その他の集落の話者からは β が聞かれた。「消しゴム」は、九鬼の 74F5 から β が聞かれたのを除くと、全員が α で発音をした。「折り紙」は δ で発音する話者が多く、久保の 71M2 と九鬼の 74F5 だけが γ で発音した。「目印」についても同様で、殆ど話者が δ で発音したが、九鬼の 74F5 と名頃の 80M18 だけが γ で発音した。 γ の音調を個人の中に持っていない人は δ で発音しがちであると推測される。「ひょうたん」の音調は、 $\alpha 5$ 名、 $\beta 2$ 名、 $\delta 3$ 名とばらつきが見られた。「耳かき」については、京上の 64F13、九鬼の 74F5、名頃の 80M18 から β が聞かれ、その他の話者からは α が聞かれた。「餅つき」は α の音調の語であるようだが、久保の 61F3、九鬼の 74F5、名頃の 80M18 からは β の音調が聞かれた。「くちびる」については集落間に差が見られた。京上の話者からは γ の音調が聞かれ、その他の集落の話者からは β の音調が聞かれたのである。

四拍名詞のアクセントは α であることが圧倒的に多く、 α の音調が一度も聞かれない語は 29 語中 6 語（「家計簿」「満月」「市役所」「折り紙」「目印」「くちびる」）しかなかった。四拍名詞については、 α の音調をベースにして様々なバリエーションが生まれているようである。

3-2. 動詞のアクセント

3-2-1. 二拍動詞

第一類五段活用動詞について、下瀬、久保、京上、九鬼、栗枝渡、若林の話者から全ての語について LH という音調が聞かれた。しかし、名頃では少し異なるアクセントが聞かれた。80M18 は「売る、積む、飛ぶ」を HL、「買う、乗る」HH で発音した。同じ名頃に住む 78F19 は、全ての語について HL と発音した。名頃では、第一類五段活用動詞を HL と発音するのが優勢である。一段活用動詞についても、名頃とその他の集落で違いが見られた。下瀬、久保、京上、九鬼、栗枝渡、若林の話者は、殆どの語について LH と発音した。例外があったのは、久保の 71M2 のみで、71M2 は「煮る、似る」を HL と発音した。名頃の話者については、80M18 が全ての語を IHL と発音し、78F19 が「着る、する、いる」を HL、「煮る、似る」を LH と発音した。「煮る、似る」については、名頃以外の集落のアクセントの影響を受けている可能性があるが、概ね、名頃では第一類一段活用動詞を HL と発音するのが優勢である。これはその他の集落とは異なる。

第二類は、全ての集落、全ての話者から LH が聞かれた。例外的に、五段活用動詞「飼う」について、名頃の 80M18 と 78F19 から HL が聞かれた。また、一段活用動詞「得る」について、久保の 71M2、名頃の 80M18 と 78F19 から HL が聞かれた。「買う」と「飼う」、「煮る」と「似る」など、同音異義語でもアクセントは変わらないようで、音調による弁別はない。

3-2-2. 三拍動詞

第一類五段活用動詞については、個人間でかなり異なる音調が聞かれた。詳述していきたい。まず下瀬の 77M9 は LHL (「囲む、使う、昇る」と LHH (「歌う、並ぶ」) で安定せず、どちらのアクセントも聞かれた。その他の話者については、音調は異なるが、安定したアクセントが聞かれた。第一類五段活用動詞を HHH で発音したのは、久保の 71M2 と名頃の 78F19 である。その語頭を下げて LHH と発音したのは、久保の 61F3、京上、九鬼の 76M4、栗枝渡、若林であった。語頭低下に有核化が起こった LHL も、九鬼の 74F5 と、名頃の 80M18 から聞かれた。一段活用について述べると、全ての集落、全ての話者から高く平らに発音しようとする傾向が見られた。語頭が低下して LHH と発音したのは下瀬、久保 (71M2)、栗枝渡、若林であり、その他の集

落からは HHH が聞かれた。特別に、名頃の 80M18 からは LHL が聞かれた。他の話者全員に有核化が起こっていないことを考えると、これは名頃の特徴というより、個人的な特徴であろうと推測される。

第二類五段活用動詞について、全ての集落、全ての話者から安定して HLL が聞かれた。一段活用動詞については、名頃の 80M18 を除く全員から全ての語について HLL が聞かれた。名頃の 80M18 は「受ける、降りる、逃げる」を LLH、「起きる」を HLL と発音しており、京阪式に近い印象を受ける。

3-2-3. 四拍動詞

四拍動詞について、それぞれの音調を詳細に見てみよう。まず、第一類については、全ての集落で高く平らに発音しようとする傾向が見られた。HHHH が聞かれたり、その語頭が低下した LHHH が聞かれたりした。特筆すべき例外は、下瀬の 77M9 から LHHL という核を持つアクセントが聞かれた点である。77M9 は 4 語全てを LHHL で発音した。下瀬の話者は 1 名しかいない為、これが個人差なのか集落差なのかは言及出来ない。次に第二類であるが、これは頭高に発音される語群である。HHLL や HLLL が聞かれた。下瀬、久保、九鬼、名頃では HHLL が優勢であり、京上、栗枝渡、若林では HLLL が優勢である。東にある集落の方が、下降が遅れる傾向にあるようである。最後に第三類である。この 2 語については集落間で異なる音調が聞かれた。下瀬、九鬼 (74F5) では LHLL が、久保、京上、九鬼 (76M4)、栗枝渡、若林、名頃 (78F19) では LHHH が聞かれ、名頃 (80M18) からは「抱える」=LLH、「支える」=LHLL が聞かれた。四拍名詞の第三類は安定せず、集落のみならず個人間でも差があり、様々なバリエーションが聞かれる。

3-3. 形容詞のアクセント

二拍形容詞について、全ての話者から安定して LH が聞かれた。また、三拍形容詞も同様に、全ての話者から安定して HLL が聞かれた。第一類と第二類に音調の対立はない。

4. 分析と考察

以下が調査結果についての詳細な記述報告であるが、次に三つの点から東祖谷山村の各集落のアクセント体系について考察したい。まず、七つの集落

間でアクセント体系に違いがあるかどうかについてである。更に、東祖谷山村のアクセントに式的対立が見出せるかという点である。最後に、先行研究に照らし合わせながら、東祖谷山村のアクセントとは一体何なのか考える。

4-1. 集落間でアクセント体系に違いはあるか

久保在住の話者 71M2 が、インタビュー中に次のような内容を語って下さった。「同じ祖谷でも、名頃というところに行けばアクセントが違う。」これをヒントに、集落間でアクセント体系に違いが見られるかについて検討する。

一拍名詞を見ると、第一類については、久保・九鬼・栗枝渡・下瀬・京上・若林ではLHが多数、名頃はLH(80M18)・H-L(78F19)となっている。第二類は両者共H-L、第三類はL-Hとなっている。従って、一拍名詞の類の統合数は、久保・九鬼・栗枝渡・下瀬・京上・若林・名頃の80M18は2($1 \cdot 3/2$)、名頃の78F19は2($1 \cdot 2/3$)となる。二拍名詞については、全ての地点で第一類はLH-H、第二類・第三類はHL-L、第四類はLH-Hになっており、第五類はLH-Lが多数である。但し、名頃の80M18からは第四類にLH・LL-Hが聞かれるなど、名頃では京阪式アクセントの面影が見られることが多々あった。三拍名詞についても同様の傾向が見られた。

以上のように、名詞については久保・九鬼・栗枝渡・下瀬・京上・若林・名頃で顕著なアクセント体系の違いは見いだせなかったが、名頃に京阪式アクセントの面影が見出せるのは特筆しておくべきポイントであろう。

次に動詞について検討してみよう。二拍名詞第一類について、名頃の80M18は「売る、積む、飛ぶ」をHL、「買う、乗る」HHで発音したこと、同じ名頃に住む78F19は、全ての語についてHLと発音したこと、名頃では、第一類五段活用動詞をHLと発音するのが優勢であることは先述した通りである。これは讃岐式アクセントの動詞の音調と一致する。また、三拍動詞のアクセントをLHLと発音する。即ち、名頃という集落は、動詞の一部について讃岐式アクセントを有するのである。名頃の動詞のアクセント体系を調べたものに上野(2000)があるが、そこで述べられている名頃の動詞アクセント体系についての記述についても、本稿と論旨を反するものではない。

このように、本項では集落間でアクセント体系に違いがあるかどうかについて検討したわけであるが、その答えは次のようなものになろう。久保・九鬼・栗枝渡・下瀬・京上・若林のアクセント体系と、名頃のアクセント体系

は異なる。名頃のアクセント体系は、名詞は京阪式アクセント、動詞は讃岐式アクセントの色を見せるという複雑なアクセント体系を持つものである。

4.2. 式の対立が見出せるか

東祖谷山村について、久保・九鬼・栗枝渡・下瀬・京上・若林と名頃でアクセント体系が異なることは式の対立の有無という点からも指摘出来る。京阪式アクセントでは、低く起こる語は「この」等に接続して句中にあっても低起性を保つものとされているが、東祖谷山村、少なくとも久保・九鬼・栗枝渡・下瀬・京上・若林では低起性が既に消滅しており、対立がない。

名頃については、菅生で生まれて名頃に移動した 78F19 は特殊なケースとして考えなければならないが、名頃の話者 80M18 について見てみると、名頃の話者 80M18 には式の対立が見られ、名詞には京阪式アクセントに近いものが聞かれる。菅生で生まれて名頃に移動した 78F19 は式の対立が殆ど消滅しており、「この窓を」(第五類)に僅かにその片鱗が見える程度である。久保・九鬼・栗枝渡・下瀬・京上・若林では式の対立は消滅してしまっているが、京阪式アクセントの使用地域により近い名頃では対立が残っているということだろうか。菅生から名頃に移住した 78F19 から式の対立が僅かに見えているところからも、名頃と菅生の間に式の対立の有無の境界線を引くことが出来そうである。

4.3. 垂井式-C型に類するアクセント

先行研究(生田・1951)によると、東祖谷のアクセントは垂井式-C型となっている。生田(1951)の垂井式アクセントの分類を整理すると以下のようになる。

一拍名詞：A型2 (1/2・3)、B型2 (1・3/2)、C型2 (1・3/2)

二拍名詞：A型2 (1/2・3・4・5)、B型2 (1・4/2・3・5)、C型3 (1・4/2・3/5)

3節の記述内容を、生田(1951)の垂井式アクセントの分類に当てはめてみると、東祖谷山村の各集落のアクセント体系は垂井式C型ということになる。徳島県下の特に山間部では語頭の低下が激しいので、生田が1951年に示

した音調とはやや異なる（語頭が低下している）が、C 型であることには変わりはない。

また、生田（1951）の分類を受けて、中井（1990）が更に C 型を詳細に分類しているが、ここでは下降調を問題にしていないので、C 式 f 型・C 式 n 型・C 式 nu 型の何れであるかは特に論じない。

5. おわりに

東祖谷山村のアクセントについてはまだまだ不明確な部分が多いが、今回の調査で明らかになった部分もあると思う。

まず、集落間でアクセント体系に違いがあるということが分かった。そしてそれには京阪式アクセント・讃岐式アクセントが関係しているということも分かった。

次に、式の対立が見出せるかという問題であるが、これについては集落間で違いがあった。久保・九鬼・栗枝渡・下瀬・京上・若林には高起式と低起式の対立は見出せない。高く始まって低く始まって良いのである。しかし、久保・九鬼・栗枝渡・下瀬・京上・若林から少し離れて東に位置する名頃では、一部に式の対立が見出せた。久保・九鬼・栗枝渡・下瀬・京上・若林より、東寄り（徳島県は県東部に京阪式アクセントが分布している）であるという地理的理由から式の対立が一部保存されていたものと考えられる。

最後に東祖谷山村のアクセントは一体どのようなものであるかということであるが、端的に言って、垂井式-C 型に類するアクセントであることが分かった。これは生田（1951）から 60 年経っても変わっていない。久保・九鬼・栗枝渡・下瀬・京上・若林は垂井式-C 型に類するアクセントである。但し、中央部より東寄りに位置する名頃では、名詞には京阪式アクセントが、動詞には讃岐式アクセントの面影が残るアクセントが聞かれた。

以上、まだまだ不明な点も多いが、これで東祖谷山村のアクセントについて執筆を終える。

【付記】

今回の発表は、2008年3月に徳島大学国語学研究室から発行された『東祖谷のことば』で報告した「東祖谷のアクセントについての一考察」のデータを増やし、内容を発展させたものです。また、2008年6月に行われた徳島大学国語国文学会第38回研究会（於徳島大学）で発表させて頂いた内容を、そのときの質疑に答える形で加筆・修正したものでもあります。

【参考文献】

- 生田早苗（1951）「近畿アクセント圏邊境地區の諸アクセントについて」
『国語アクセント論叢』、法政大学出版局
- 上野和昭・仙波光明・森重幸（1991）「徳島県三好郡山城谷アクセントの動向
—二拍名詞を中心に—」『徳島大学国語国文学』4号、徳島大学
国語国文学会
- 上野和昭・森重幸（1992）「徳島県出合アクセントについて」『徳島大学総合
科学部紀要』5、徳島大学総合科学部
- 上野和昭（1994）「徳島県木頭村の方言アクセントについて」『言語文化研究』
1、徳島大学総合科学部
- 上野和昭編（1997）『日本のことばシリーズ三十六 徳島県のことば』、
明治書院
- 上野和昭（2000）「徳島県下の讃岐式アクセントにおける動詞アクセント体系
について」『早稲田大学大学院文学研究科紀要』（45-3）早稲田大学大学院
文学研究科
- 岸江信介他編（2008）『東祖谷のことば』、徳島大学国語学研究室
- 金田一春彦（1975）『日本の方言 アクセントの変遷とその実相』、教育出版
- 坂本清恵・秋永一枝・上野和昭・佐藤栄作・鈴木豊編（1998）『「早稲田語類」
「金田一語類」対照資料』、アクセント史資料研究会
- 仙波光明・岸江信介・石田祐子編（2002）『徳島県言語地区』、徳島大学
国語学研究室
- 中井幸比古（1990）「京都府における、いわゆる垂井式諸アクセントについて
—1—」『国語研究』（54）、国学院大学国語研究会
- 宮城文雄（1961）「香川・徳島」『方言学講座第3巻西部方言』、東京堂
- 森重幸（1958）「徳島県のアクセント概観」『神戸大学国文論叢』第7号

- 森重幸 (1982) 「徳島県の方言」『講座方言学 中国・四国地方の方言』、
国書刊行会
- 森重幸 (1984) 「徳島県三好郡池田町三縄 (旧三縄村) 出合アクセントと川崎
アクセント—二拍名詞アクセント体系の変化—」、私家版
- 森重幸 (1989) 「徳島県の方言アクセント概観—32 年後の動向—」、私家版
- 山口幸洋 (1966) 「兵庫県の垂井式アクセントについて」『音声学会会報』(122)、
日本音声学会
- 山口幸洋 (1988) 「垂井式諸アクセントの性格」『国語学』155、国語学会
- 山名邦男 (1956) 「徳島県下の音調」『兵庫方言』1、兵庫県方言学会

ⁱ 徳島大学大学院総合科学教育部 (博士後期課程) 地域科学専攻

日本学術振興会特別研究員 (DC2)

徳島大学非常勤講師

ⁱⁱ 『東祖谷のことば』より引用。地点番号は集落名に置き換えた。

ⁱⁱⁱ 金田一春彦博士の調査方法に拠る。

^{iv} 下瀬の 77M9、九鬼の 76M4、栗枝渡の 73M8、名頃の 78F19 からは γ の音調は一度も聞かれなかった。 γ の音調が聞かれなかったのは調査語の数が 29 語と少なかった可能性もあるが、他の話者からはしばしば γ の音調が聞かれている以上、下瀬の 77M9、九鬼の 76M4、栗枝渡の 73M8、名頃の 78F19 の 4 名は、個人の中にこの音調を持っていない可能性が高い。

^v この話者の現住所は名頃であるが、出身地は菅生 (距離的には久保と名頃の中間に位置する集落で、名頃とは隣同士の集落である) である。在住期間の長い名頃の話者ということにして分類を行ったが、名頃のアクセントをそのまま実現している話者だと考えるのは危険である。